

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 10 月 26 日現在

機関番号：17201

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2013～2015

課題番号：25590226

研究課題名(和文) ナラティブ・ベースドな混合研究法による附属学校等の教育効果に関する調査研究

研究課題名(英文) Investigation about the educational effect of the attached school in national universities by narrative approach

研究代表者

佐長 健司 (SANAGA, Takeshi)

佐賀大学・文化教育学部・教授

研究者番号：50253571

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)： 国立大学の附属学校を中心に、その教育効果を測定するために調査を行った。それは、いわゆる学力テストではなく、児童・生徒にインタビューを行い、得られた語り(学びのヒストリー)を解釈する方法によるものであった。

明らかになったことは、児童・生徒の学びは多様で個性的であるが、学校や家庭等の状況に埋め込まれていることである。そのため、学校や家庭等の状況的圧力によって学びが制限されるが、それらからリソースを得て積極的に学びを拡張していることも大ある。そこで、学校や家庭の学習状況を重視した教育が強く求められると言えよう。

研究成果の概要(英文)： It was investigated about the educational effect of the attached school in national university. That was chosen as the way to interview students and interpret their obtained talk (history of learning), not achievement tests.

It's the case that students' learning is embedded in the situation of the school and the home that it became clear. Therefore learning is restricted by the situation-pressure by which it's for the school and the home. On the other hand they get a resource from situations and are expanding learning aggressively. Therefore the education which emphasized the situation of the school and the home is desired.

研究分野：学校教育学

キーワード：附属学校 ナラティブ 学びのヒストリー 状況学習論

1. 研究開始当初の背景

国公立大学が併設する附属学校等には、小学校や中学校があっても高等学校がないものなど、さまざまな設置パターンがみられる。しかし、多くの地域において、いわゆるエリート校とみなされ、当該地域の学校教育や進学について大きな影響を与えている。

研究開始以前には、附属学校等の多様性は附属学校等の選抜性、併設大学の選抜性によって部分的に説明できるが、推薦による内部進学（以下、内部推薦）は公正な選抜の手続きとは認識されにくいことが明らかになっている（村山 1999 など）。また、九州地区に立地する国立大学の附属学校の卒業生を対象とした質的な調査研究からは、附属学校の児童・生徒の社会化に、やがて進学する学校の教育が予期的な影響をおよぼしており、かつその教育が地域に特有の強く性質を帯びたものである可能性が見出された（佐長 2012）。

村山詩帆 1999, 「ジェンダーと『傍系』大学進学ルート 共学/別学『エスカレーター校』における進路分化をめぐって」、『東北大学教育学部研究年報』47: 57-71.

佐長健司 2012, 『ナラティブ・アプローチによる附属学校卒業生の学びの歴史に関する調査研究』（平成23年度日本教育大学協会研究助成研究成果報告書）。

2. 研究の目的

大学が併設する附属学校等は国公立を問わず存在し、さまざまな設置パターンや進路形成、「エリート校」とされるなどの地域性がみられる。これら附属学校等の内部進学制度は、先進諸国をみても他に類がなく、国内においても「お受験」と称される社会現象と密接な関わりのあ

る特異な組織構造を有している。しかしながら、附属学校等を対象とする先行研究は蓄積が乏しく、その際立った特異性にもかかわらず、その教育機能と効果については十分に明らかになっていない。そこで、本研究では附属学校の教育機能について、児童・生徒の学びに焦点を当て、一般校の場合とも比較しながら調査を行うこととする。附属学校が果たす役割について、評価するための方法論、説明モデルについて検討したい。

3. 研究の方法

研究初年度は、(1)理論的・方法論的枠組みの検討、(2)受験情報誌等調査の実施、(3)データベース構築と定量データ分析を主たる研究課題とし、日本の附属学校等の国際的な位置づけを確認すると同時に、理論的枠組みを検討し、インタビュー調査のための方法を明らかにする。研究2年目は、前年度に検討した理論的枠組み、インタビュー・ガイドにもとづき、(1)ナラティブ・アプローチによる集中的なインタビュー調査、(2)ナラティブの分析と定量データによる検討、(3)調査研究結果について研究発表、及び研究報告書の作成を行う。

4. 研究成果

下に記した2冊の研究成果報告書には、15本の論考を収めることができた。全体としてみれば、幅広い多様な報告が織りなすテキストができあがったように思える。すなわち、佐賀大学文化教育学部の附属学校園の場合にとどまることなく、筑波大学附属駒場中・高等学校、及び専門高等学校等の生徒たちの学びの歴史をも得ている。さらには、日本屈指のオーケストラの器楽奏者、イタリアの大学生の学びについても明らかにしている。

明らかになったことの第1は、佐賀大学

文化教育学部附属学校における学びと筑波大学附属駒場中・高等学校におけるそれとの比較である。東京都と佐賀県という、それぞれの地域社会における、かなり異なる学校教育と生徒たちの学びを対照的に見出すことができよう。そこでは、附属学校という名称は同じでも、異なる学校があり得ることを知る。前者は活動的な授業や学校行事、部活等の一般的な教育において、一部不適応な生徒も認められるものの、全体的に質的に高いレベルを実現している。一方、後者では生徒の個性や自主性が最大限に尊重され、強制されることのない自由な学びが生徒だけでなく、教師をも育てていることがうかがわれた。

第2は、附属学校と公立学校の場合との比較である。同じように中学生・高校生であっても、それぞれに生徒の学びは大きく異なり、形成された自己と世界の差異は明瞭である。さらには学びのための課題の異同をも具体的に見出すこともできよう。いずれにしても、生徒の課題に応じて教師が寄り添うことが求められる。そこでは、生徒のそれぞれに異なる課題に真摯に向き合っているのか、という問いが教師に向けられる。

第3は、卓越した芸術家や海外の大学生の場合という、あまり触れることのない学びと身近な学校におけるそれとの比較である。ともすれば遠く離れた知らない世界の学びについては、想像も及ばないように思える。しかし、実際はそうでもなく、それらには附属学校をはじめ身近な生徒たちの学びとの共通性や同様の課題を見出すことができる。ただし、差異も明瞭にとらえておくことも必要である。そうするならば、多様な学びについての広い視野を得ることができよう。

このように、複数の附属学校園の卒業生の学びのヒストリーから始まって、多様な

それらを明らかにすることができる成果が得られた。また、附属学校教員からの改革の提言も得た。ここに、小さいかもしれないが、確かな研究成果を認めることができよう。

残された課題としては、ナラティブ・ベースな混合研究法の開発を目指したが、十分な成果は得られなかったことである。定量データの分析を質的研究であるナラティブ解釈に活かすことは難しいことが明らかになった。サンプル・スタディとケース・スタディの統合というよりも、複眼的に異なる視点を活用することが妥当なのかもしれない。そもそも、社会のなかの個人なのか、個人のなかの個人なのかという問いに揺れてきた。両者の相互作用であろうが、それはどのようなものかについて、具体的に検討することが課題として残った。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

佐長健司「ナラティブ・アプローチによる歴史テスト解答行為の生態学的検討 平成25年度大学入学選抜大学入試センター試験「世界史A」を事例として」佐賀大学文化教育学部『研究論文集』第20集第1号、2015年、pp.33-46。

村山詩帆「受験体制の生成と変容 「お受験」から「テスト体制」へ」腰越滋編『教師のための教育学シリーズ11 子どもと教育と社会』学文社、2016年、総ページ数：27。

[学会発表](計3件)

佐長健司「社会科カリキュラムの生態学的研究 プラン・PDCA・学習環境デザインを超えて」日本社会科教育学会第64回全国研究大会(自由研究発表 - 第5分科)、静岡大学、2014年11月30日。

村山詩帆「国立大学附属学区と接続の課題」
日本教育学会第72回大会テーマ2-B部会
「学校のリアリティと改革の可能性(b)」
九州大学、2014年8月24日。

佐長健司「社会変革へ向かう社会科学習を
求めて 「正統的周辺参加」における「拡
張による学習」の可能性 」日本社会科
教育学会第65回全国研究大会、宮城教育
大学、2015年11月7日。

〔図書〕(計2件)

佐長健司(編著)『学校秀才を育てる学力・
自分づくりが求める学力-聞き語り“学
び”のヒストリー”から明日の教育を考
える』明治図書、2014年、pp.1-187。

平成25~27年度研究成果報告書 JSPS 科研
費25590226(挑戦的萌芽研究)
ナラティブ・ベースドな混合研究法によ
る附属学校等の教育効果に関する調査研
究 研究代表者 佐長健司(佐賀大学文化
教育学部教授)『学校教育を問い直す学
びのヒストリーの研究』、2016年、pp.1-241

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

〔その他〕

次のように、研究科報告会を開催した。
学校教育を問い直す「学びのヒストリー」

研究会

- 1 主催 科研費プロジェクト JSPS 科研
費25590226「ナラティブ・ベースドな混
合研究法による附属学校等の教育効果に
関する調査研究」(研究代表者:佐長健
司)
- 2 日時 2016年2月6日(土)15:
00~18:00
- 3 会場 104講義室(佐賀大学文化教
育学部1号館2階)
- 4 研究発表
研究発表1 老兵よ、若者から学べ 佐
賀大学文化教育学部附属学校園卒業生

の語りから 庄田敏宏(文化教育学部
准教授)

研究発表2 学習からの自由と学びへの
自由 筑波大学附属駒場中・高等学校
教育実習生のナラティブから 佐長健
司(文化教育学部教授)

5 シンポジウム

テーマ 学校教育を問い直す附属学校園
のこれから

シンポジスト

井上正允(元文化教育学部教授・副学
部長・附属中学校長)

庄籠道子(文化教育学部附属幼稚園副
園長)

脇山英靖(文化教育学部附属小学校教
諭・同研究部長)

野田英樹(文化教育学部附属中学校教
諭・同研究部長)

コーディネーター

板橋江利也(文化教育学部教授)

6. 研究組織

(1)研究代表者

佐長健司(佐賀大学文化教育学部教授)
研究者番号:5025671 SANAGA Takeshi

(2)研究分担者

中山亜紀子(佐賀大学全学教育機構
准教授)

研究者番号:20549141 NAKAYAMA Akiko

村山詩帆(佐賀大学全学教育機構准教授)

研究者番号:30380786 MURAYAMA Shiho

(3)研究協力者

栗原淳(佐賀大学文化教育学部教授)

研究者番号:40215067 KURIHARA Atushi

田中彰一(佐賀大学文化教育学部教授)

研究者番号:80197425 TANAKA Syouichi

栗山裕至(佐賀大学文化教育学部教授)

研究者番号:20274566 KURIYAMA Hiroshi

板橋江利也(佐賀大学文化教育学部教授)

研究者番号:10404112 ITABASHI Eriya

庄田敏宏(佐賀大学文化教育学部教授)

研究者番号:10432957 SYOUDA Toshihiro